

『それから』論

——〈家〉と〈個人〉の相克の構図にみる漱石的自我のありよう——

呉 俊 永

『それから』（明治四二年）の基層をつらぬくモチーフとなっているのは、主人公代助の〈家〉制度への憎悪である。この作品は「自然」の意志―それを本稿では、制度的なるものに抗う個人の意志の自由、あるいは性情の解放を含蓄するとみる―にしたがって生きようとした主人公代助の悲劇の物語であるが、その悲劇の背景となっているものは、明治期という時代を限界づける〈家〉制度そのものであった。というのは、この作品が〈家〉という制度の束縛によって埋没させられようとする自己のアイデンティティ（または意志の自由の主体者）をどのようにして取り戻すべきかという、主人公代助の精神的苦悩をとおして〈自我〉を顕在化させていくことが意図された作品だからだ。

『それから』は「日本の近代小説中まれにみる、純乎とした一篇の恋愛小説¹⁾」という猪野謙二氏の評価がなされて以来、代助の三千代への愛の告白場面をもって「息づまる緊張と美しさがはりつめていて、この小説の魅力の根源」であり、この作品は「純乎たる一篇の恋愛小説」たり得た²⁾（平岡敏夫氏）というふうな見方―共感するにせよ反撥するにせよ―が主流をなしてきた。そうした研究史の潮流をふまえて、これまでは漱石の倫理との関連で論じられることが多かったこの作品を、「自立した感性世界として理解」しようと試みたのが吉田熙生氏の「代助の感性―『それから』の一面」である。氏は代助の感性的な一面を考察しながら、かれの感性が最も強くはたらく現実の諸関係の場を〈家〉に想定すること³⁾で、代助の感性に及ぼした影響はもとより、「物語の構造としても家族の解体は重要な役割を果たしている」と指摘している。氏のいう「家族の解体」とは、代助と三千代の関係によってもたらされた平岡夫婦の実質上の関係の破算、代助の

長井家からの勘当（長井家の崩壊）、そして結婚前に三千代が属していた菅沼家（菅沼兄妹）の崩壊を指している。氏はそうした〈家〉の崩壊をピークとして代助の感性がはたらいっているという見方を示しているのだが、氏のいう、こうした「家族変動」という要因が代助の感性にどれほどの影響を及ぼしたのかという点に関する論旨には疑問が残る。

なぜなら、吉田氏は代助の「論理」をかれの「感性の喩」としてとらえた上で、「*nil admirari*」とはその極端な感性のはたらかみであると説いているが、「二十世紀の日本に生息する彼（代助―引用者注）は、三十になるか、ならないのに既に *nil admirari* の域に達して仕舞つた」（二）という語り手からの言及は、氏のいう平岡夫婦の實質上の解体以前、そしてさらには、長井家の解体以前の時点においておこなわれているからだ。その解釈は、いわゆる「*nil admirari*」が形成された時点と「家族の解体」の時点とを混同しているといわざるをえない。したがって、代助の感性の形成には菅沼兄妹の解体がある程度影響を及ぼしたとはいえるものの、それは、少なくとも平岡夫婦の「實質上の解体」以前、そして代助がその一員である長井家が解体する以前には、すでに形成されていたというべきではなからうか。むしろ、代助の感性に影響を及ぼした要因としては、〈家〉の解体に至る以前、すなわち、〈家〉のなかでの構成員の間の相関関係、というよりも葛藤がもつと重視されねばなるまい。

本稿では、まず第一に、旺盛な生活欲をもって働くべき年頃であるにもかかわらず、なににも無感動な心理状態（「*三* *admirari*」）に陥っている代助の異常なありように注目し、かれがそうした状態に陥らねばならなかった原因はいったいどこにあったのかを追究してみたい。その場合、個人の代助と〈家〉制度との相克がその射程のなかに入ることになる。

そして第二としては、この相克をふまえて、この作品の主要なモチーフから析出される漱石の自我の特異性と、その特異性に影を落としている〈家〉制度への漱石の憎悪を明らかにしたいと思っている。いったい漱石といえば、近代的自我の自覚とその確立を小説において具現した作家として知られている。しかし、漱石の唱える〈近代的自我〉なるものはたして普遍的・一般的な概念であったのだろうか。この作品が漱石の自我の自覚というものを本格的なテーマとする最初の作品であることは周知のことであろう。そこであらためて作品分析を通して漱石の自我とはいかなるものであったのか、その特異なありようを浮かび上がらせることにする。

『それから』は主人公代助が昼寝から眼を醒ます場面から始まっている。眼を醒ました代助が枕元の新聞を取り上げると、そこには「男が女を斬つてゐる繪」と「學校騒動」(一)が大きな活字で出ている。代助はしばらくそれを読んでしたが、すぐ「倦怠だるそうな手から、はたりと新聞を夜具の上に落」とす。新聞の記事に反映されている不安な社会状況に接しても傍観者の態度しか示さない代助の姿。この冒頭の象徴的な場面は、世間との交渉を断つて「自家特有の世界」(二)を作り上げ、そのなかに閉じこもろうとする代助のありようを早くも読者のまえに提示している。この代助と社会との乖離は、語り手の「三十になるか、ならないのに既に *in admirant* の域に達して仕舞つた」(傍点引用者、以下同様)とか、「自家特有の世界の中で、もう是程に進化―進化の裏面を見ると、何時でも退化であるのは、古今を通じて悲しむべき現象だが―してゐた」という否定的なニュアンスの叙述によって一層あきらかになるのだが、なぜ若し知識青年である代助が無感動な状態に陥り、世の中に背を向けるしかなかつたのだろうか。

代助は大学を卒業しても定職につかず、〈家〉からの経済的援助によって暮らしている。「働らくのも可いが、働らくなら、生活以上の働でなくつちや名譽にならない。あらゆる神聖な努力は、みんな麵麩を離れてゐる」(六)という生活哲学にもとづいて、「日本を讀んだり、音楽を聞きに行つたり」(一)しながら暮らしている。そのような代助に対して書生門野は「あ、云ふ具合に遊んで居たいね」と皮肉をいう。父は「三十になつて遊民として、のらくらしてゐるのは、如何にも不體裁だな」(三)とたしなめる。が、周囲の人たちがいう、いわば生活のためにはたらくことは代助にとつては何の意味ももたない。

大学時代から趣味の審判者たちという意味の「*arbitrator*」(エレガントアルム)「*arbitrator elegantiarum*」(十四)という異名を与えられたことからわかるように、あらゆる趣味生活・美的活動を享受してきたかれには、やはり「生活以上の働」きのみが意味をもつ。「麵麩を離れ水を離れた贅澤な經驗をしなくつちや人間の甲斐はない」(二)と信じ切っているかれには、「職業の爲に汚される内容の多い時間を有する」(三)ための工夫やその履行、すなわち、あらゆる趣味生活だけが生き甲斐を感じさせる。このような処世を信奉する代助は、世間からすれば―父の言葉にのみじくも表れているように―〈高等遊民〉である。

たとえば、石川啄木は『時代閉塞の現状』（明治四三年）のなかで、日本にはいま「遊民」が増えつつあり、どんな僻村へ行っても、三人や五人の中学卒業生が遊民となって無駄話をしている、と当時の社会現象を指摘しているが、その指摘は代助にもあてはまるうか。「遊民」である代助が主人公として登場したのも、そうした社会状況が背景になっているといえよう。

では、この〈高等遊民〉とはどのような人間を指すのか。石川啄木は「彼等の事業は、実に、父兄の財産を喰ひ減す事と無駄話をする事だけ」といつて、いわゆる〈余計者〉としての一面に注目していた。それを米田利昭氏は「ならずともよいのに自ら進んで遊民となる、いわば自発的失業者」と定義し、そうなる条件として経済的余裕、美的享受、文明批判の三つを挙げている。⁽⁵⁾ そうだとするならば、〈家〉からの経済的補助によって暮らしながら、「麴麴に關係した経験は、切實かも知れないが、要するに劣等だよ。麴麴を離れ水を離れた贅澤な経験をしなくつちや人間の甲斐はない」という主義にもとづいて、あらゆる耽美的生活を享受しつつ、他方ではすぐれた文明批判論を展開する代助は、まさに高等遊民といえよう。

ところが、その高等遊民が展開する社会批判論は、たとえそれが正鵠を射ているとはいえ、実際の自分の生活との間には必ず懸隔が存在するはずである。かれらの根幹はあくまでも耽美主義的な快樂思想にあつて、代助のいう「生活のための働」を忌避するところにあつた。ただしその場合、世間に対する自分の面目が気にかかるため、どうにかして自己の無為を正当化せねばならない。それゆえ、高等遊民が口にする社会批判の論理はつねに自己弁明めいた性格を帯びていくほかはない。代助もまたその例外ではない。

代助は友人平岡から「何故働かない」（一六）と問い詰められたとき、「そりや僕が悪いんぢやない。つまり世の中が悪いのだ。もつと、大袈裟に云ふと、日本對西洋の關係が駄目だから働かないのだ」と答へ、それを説明するための社会批判論を展開するが、それが結局は自己正当化の論理になっていることは、その適例といえる。そこで、ここではそのことをテキストの第六章の言説を中心に追つてみることにしよう。

その言説によれば、「日本對西洋の關係」は「牛と競争する蛙」のような無理なものであつて、その間に生じるあらゆる問題が一々個人の上に影響を及ぼしているから、国民の誰もが「精神の困憊と身體衰弱」の状態に陥り、ひいては「道徳の敗北も一所に來」る「暗黒」のような社会にならざるをえないという。要するに、代助は西洋の圧迫によって「精神

的、徳義的、身體的に、大體の上に於て「不健全になった日本の社会状況に失望し、そのような状態のなかで自分一人がいくらがんばったってしょうがないから働かない」とっているのである。「論理に於て尤も強い」(十) 知識青年である代助からすれば、近代開化期の日本に西洋の先進物が押し寄せるにつれて生じる価値観の混乱や既存秩序の破壊などあらゆる社会現象はよく理解されているはずである。したがって、そうした時代の崩壊感をふまえた自己弁護の論理は、「繊緻な思索力と、鋭敏な感應性」(一)を誇るかれにふさわしく、鋭い洞察と徹底した分析によるまさにすぐれた社会批判となっているといえよう。

しかし、高等遊民の論理がそうであるごとく、この代助の論理にもまた不明瞭なところは残る。わずか三年の間にどれほど社会が不健全な方向に変化したのかという判断はともかく、不健全な社会状況が代助の「有爲多望さ」(六)とどれほど関連をもつというのだろうか。社会が健全だったときの有爲多望さは、自分の体裁を気にしたための、強いて演じた見せかけにすぎなかった。このことは、「無論食ふに困る様になれば、何時でも降参するさ。然し今日に不自由のないものが、何を苦しんで劣等な経験を嘗めるものか」(二)というかれの言葉によって裏づけられている。もしも、かれが変革の意図をもって社会批判をしていたとすれば、自分の意志によって現実社会にはたらきかけて、少しでもその社会を動かそうとしなければなるまい。

人は高等教育を受ければ受けるほど、社会を直視し得る眼をもつようになる。そのためにかえって、学校教育によって形成された社会観と現実の社会とが必ずしも一致しないことが自覚されるようになる。現実社会に通用しない「日本の學校でやる、講釋の倫理教育」(九)を受けながら、両者の緊張関係のなかに立たされて、「一時非常な矛盾の苦痛」を感じなければならなかったと告白している代助の境遇がその典型的な例である。この場合、積極的に現実社会のなかに飛び込んでほたらきかける人もいるだろうし、その反対に消極的な態度をもって自己の世界以外には無関心になる人もいるだろう。自分の意志を実現させることに自己存在の価値を認めようとする平岡が前者に属するとすれば、「有の俣の世界を、有の俣で受取つて、其中僕に尤も適したものに接觸を保つて満足する」(一六)代助は後者に属する。

だからといって、代助が始めから消極的・傍観的な生活を送っていたわけではない。代助もまた三年前には平岡と同じ思想をもっていた。確かに、当時は「生活上世渡りの経験」を重んじる一種の経験主義者であったのだが、いまは「所謂処世上の経験程愚なものはない」と思うように変化したのだ。

三年の間に、いったいどんな出来事が代助の身の上に取り、その結果として、それまでの旺盛な生活欲をもっていた知識青年が無感動・無為の状態へと変化したのだろうか。平岡から「君が昔の長井代助にならないのは怪しからん。是非なり給え。そうして、大いに遣つてくれ給え。僕もこれから遣るから君も遣つてくれ給え」といわれたとき、代助は「今の自己（代助―引用者注）を昔に返そうとする真率な又無邪気な一種の努力を認め」、「それに動かされる」。ここにおいて読者は代助が意図的な変化を遂げたことを知らされる。なぜならば、意図的な変化であるからこそ、いまだに揺れ動くのであろう。しかしながら、かれは昔の自己に戻ろうとはしない。なぜだろうか。

三

三四年前の自分を回顧して見ると、慥かに、自己の道念を誇張して、得意に使ひ回してゐた。鍍金を金に通用させ様とする切ない工面より、眞鍮を眞鍮で通して、眞鍮相當の侮蔑を我慢する方が樂である。と今は考へてゐる。……（中略）……（注、そのように考へるようになったのは）全く彼れ自身に特有な思索と觀察の力によつて、次第々に鍍金を自分で剃がして來たに過ぎない。代助は此鍍金の大半をもつて、親爺が捺摺り付けたものと信じてゐる。（六）

代助は、三、四年前にはまだ、相當の教育を受けた者がみんな「金」に見えたために、自分の「鍍金」が辛かった。そこで、早く自分も本物の「金」になりたいと焦つたため、鍍金を金に通用させようと自己の道義を誇張してきたという。ここで代助は「鍍金」「金」そして「眞鍮」という比喻表現を使つてゐるが、これらは明治四十年四月に発表された小品『京に着ける夕』⁶ においての作者の言説の延長上にある。そのなかで漱石は「子規と來て、（中略）幾點の紅燈に夢の如く柔かなる空想を縦まゝに酔はしめたるは、制服の釦を眞鍮と知りつゝも、黄金と強ひたる時代である。眞鍮は眞鍮と悟つたとき、われ等は制服を捨て、赤裸の俣世の中へ飛び出した⁶」（傍点引用者）と記している。この作者漱石の言葉と代助のそれとを照合すれば、「眞鍮」とは本然の姿、すなわち各個人の本性（＝「赤裸」。本心、意志の自由であり、かつ性情の解放を含蓄する）を指し、「金」とは社会の価値体系のなかの最高の価値、そのうちでもとくに道徳觀念を指している。しかも右の言葉からすれば、その理想的形態として、それはすべての個人に内在すべきものと信じられてゐる。このよう

に解釈されるとすれば、この「金」と「眞鍮」の間に位置する「鍍金」は、社会の最高価値たる道徳観念に従おうとするあまりに、自己の本心（意志の自由）を抑圧してしまふ一種の自己欺瞞といえよう。それゆえ、この「鍍金」はいくら塗り付けても、決して「金」になり得ない性質をもち、とうてい人間の本性を覆うことはできない代物である。それはまさに自己を虚偽で包み隠すもの（Ⅱ制服）でしかない。

代助はその「鍍金」を「金」に通用させようとつとめた。その代表的なあらわれが、三千代と平岡の間を取り持ったことである。三年前かれは三千代という女性を愛していた。が、平岡から三千代を「貰ひたいと云ふ意志」（十六）を打ち明けられたとき、自分の「未來を犠牲にしても」、平岡の「望みを叶へるのが、友達の本分だと思つて、彼女を譲つた。当時、二人の間に交わされた「凡ての言葉には、娯樂どころか、常に一種の犠牲を含んでゐる」（二二）と確信していたために、その行動（作為）は、いまになって顧みても、「過去を照らす鮮かな名譽」（八）として認識されるくらいであつた。しかし、代助は「其犠牲を即座に拂へば、娯樂の性質が、忽然苦痛に變ずるものであると云ふ陳腐な事實にさへ氣が付かずにあるた」（二二）。つまり、代助は「鍍金」のような社会道徳（友情と信義）にあまりにも価値を置きすぎたために、抑圧されていった自己の本性（本心）には氣づかなかつたのである。

ところが、やがてかれにも人間の「自然」によつて「自己の満足と光輝を棄て、其前に頭を下げなければならぬ」（八）いとが訪れる。人間の「自然」とは、この場合、意志の自由を指している。しかも「自然」とある以上、その意志の自由は社会の所産たる制度、道徳（倫理）、習慣には必ずしも従ふ必要のない別個の価値存在として定位されてみるとみてよからう。このように解釈されるとすれば、友情と信義という美名の下に自己の本心を犠牲にした代償として味わう甘美な自己陶醉よりも、自己の「自然」（意志の自由）を犠牲にしたときに、一方でわき起こる苦痛のほうが大きいという事實に代助自身が氣づいたことを意味する。それゆえ、かれは一種の英雄心理としての「満足や光輝」を棄てねばならなかつたし、心の奥に残る苦痛や後悔を認めざるをえなかつた。

その結果、代助は、たとえ社会的道徳が最高の価値体系をなしていたとしても、それが「特殊人」（十六）たる自分を制御するわけにはいかないということに氣づいた。代助は自己欺瞞を自覚したときに陥る自己嫌悪の状態になり、その当然の帰結として、無氣力になつていき、みずからを社会から疎外させようとするようになった。このようなかれの変化が「不意に大きな狂瀾に捲き込まれて、驚ろきの餘り、心機一轉の結果」としての変貌ではなく、「三年経過するうちに」（八）

發揮された「特有な思索と觀察の力」によるものとあるのは、そうした代助の精神史を語っているといえよう。

以上のことから、代助の変化の起点となったきっかけが三千代と平岡との結婚であったこと、しかもその結婚を斡旋したのは、これまで父から受けてきた教育に影響された自己欺瞞であったこと、そしてその自己欺瞞を自覚するまで三年が費やされたということがうかがえる。したがって、代助が「*ni admirari*」の状態へと陥ったのは、三千代と平岡を結ばせた後になって、自己欺瞞に気づかされたときから始まったといえるのだが、その起点が二人を取り持った直後であったことは注意してよからう。平岡が結婚してまもなく京阪地方に旅立つとき、その眼鏡越しに放たれた「得意の色」(一)をみて、代助は急に憎らしく思い、家へ帰って一日中部屋に閉じこもって考え込む場面は、かれの変貌のきっかけであった。

それから以後、代助は働く意欲を失ってしまい、世間の出来事に対して無感動の状態に陥ったのだが、この状態に対して猪野氏は「あくまでも『自然』の命ずるところに従って、その美と道義とに生きようとすればするほど、ますます無為と無感動とに陥ってゆくほかな」い悲痛な心情をまぎらわすための言い訳と解釈する。(7)ところが、「*ni admirari*」の状態に陥っている現在の時点でも、なお美を追究するかれの生活からすれば、「美と道義」に行き詰まったために無為・無感動に陥ったという氏の見解にはうなずけないところがある。ただ、たとえそうであっても、道義に生きようとしても自分の思惑通りにゆかなかったため、という氏の指摘は重要な意味をもつ。というのは、美ではなく道義への追究の行き詰まりとかれの無為・無感動との間には相当のかわりがあるが認められるし、そこにまで至ったかれの精神史はこの作品の基底をなしているからである。とすれば、代助の精神史をたどることこそ、この作品のテーマに迫る捷徑になり得るのではなからうか。

四

そうした視座に立つアプローチはまず代助と父との関係に注目せねばなるまい。なぜなら、三年前に「なまじいに遣り遂げた義侠心」(十六)の背後には父から受けた教育が大きく影響していたからである。その父はいまもなお「自己は飽までも代助の軌道を支配する権利があると信じて」(三三)いるのだが、そうした「プログラム」のために自己嫌悪という

悲哀を嘗めた代助のほうはもはや二の舞を演じるわけにはいかなかった。代助が「己」を得ず親爺といふ老太陽の周囲を、行儀よく廻轉する様に見せてある」のは、〈家〉の制度と倫理が支配していた当時の社会通念から自己を守るための最善策であったからである。それがとりもなおさず「ニルアドミラル」であつたし、父に対する隠微なたちでの反抗であつた。このような代助と父との關係を描いている次の一節は、そうした推測を可能にさせる。

代助の尤も應へるのは親爺である。(中略)親爺は又大分の八釜し屋である。子供のうちは心魂に徹して困却した事がある。しかし成人の今日では、それにも別段辟易する必要を認めない。たゞ應へるのは、自分の青年時代と、代助の現今とを混同して、兩方共大した變りはないと信じてゐる事である。それだから、自分の昔し世に處した時の心掛けでもつて、代助も遣らなくつては、嘘だといふ論理になる。尤も代助の方では、何が嘘ですかと聞き返した事がない。だから決して喧嘩にはならない。代助は子供の頃非常な肝癪持で、十八九の時分親爺と組打をした事が一二返ある位だが、成長して學校を卒業して、しばらくすると、此肝癪がぱたりと已んで仕舞つた。それから以後ついぞ怒つた試しがない。親爺はこれを自分の薫育の効果と信じてひそかに誇つてゐる。(三)

この小説で始めて代助と父との關係が語られる箇所であるが、この父子の間はしつくりいていないらしい。代助は、子供の頃には、非常な癩癪持ちだつたが、その癩癪は學校を卒業してしばらくするとやんでしまつた。そして「それから以後ついぞ怒つた試しがない」と語り手は代助の変化を知らせてくれている。しかも「親爺はこれを薫育の効果と信じてひそかに誇つてゐる」というシニカルなニュアンスの叙述をもつて、父の薫育というのはいつたようなものであつたのだろうか。なにしろ、それが子の代助を不思議と思われるほどに変化させたのだから。それゆえ、この問いは代助の精神史を探る上で重要な意味があろう。

代助の父は明治維新以前の「武士に固有な道義本位の教育」(九)を受け、それを生活の指標として生きてきた人である。その教育は「情意行爲の標準を、自己以外の遠い所に据えて、事實の發展によつて證明せらるべき手近な眞を、眼中に置かない無理なもの」である。つまり、父は国家社会の規範(論理)や〈家〉の倫理など「自己以外の遠い所」を優先し自己を抑圧し犠牲にしてきたのである。そうした姿勢は「さう人間は自分丈を考へるべきではない。世の中もある。國家もある。少しは人の爲に何かしなくつては心持のわるいものだ」(二)とか、「獨身の爲に親や兄弟が迷惑したり」(九)と

いかれの言葉によく表れている。

ところが、このような硬直した道徳を基準として社会的事実を判断しようとすればするほど、「本末を誤つた話はないと信じて」いる代助には、そうした父の教育が「迂遠な教育」としかみえなかつた。代助からすれば、人間がなにかするときに、最初から客観的にある目的を設定して、その目的に邁進させるというのは、その人間の自由な活動をすでに生まれた瞬間から奪うことであるとみなしていた。そのために、学校に入学した始めから、硬直化した道徳観念を学生に注入し、その道徳を基準にして、逆に社会的事実を判断させようとする、いわば本末を誤つた「講釋の倫理教育」は無意義なものだと考えていた。しかし、父は「習慣に囚へられて、未だに此教育に執着してゐる」し、またその教育を子の代助に固執している。

實際を云ふと親爺の所謂薫育は、此父子の間に纏綿する暖かい情味を次第に冷却せしめた丈である。少なくとも代助はさう思つてゐる。所が親爺の腹のなかでは、それが全く反對に解釋されて仕舞つた。何をしやうと血肉の親子である。子が親に對する天賦の情が、子を取扱ふ方法の如何に困つて變る筈がない。教育の爲め、少しの無理はしやうとも、其結果は決して骨肉の恩愛に影響を及ぼすものではない。儒教の感化を受けた親爺は、固く斯う信じてゐた。自分が代助に存在を與へたといふ單純な事實が、あらゆる不快苦痛に對して、永久愛情の保證になると考へた親爺は、その信念をもつて、ぐんぐん押し行つた。さうして自分に冷淡な一個の息子を作り上げた。

(三)

家長以外の者にはその個性が認められなかつた（家々制度のなかで育てられた父からすれば、父子の間の「骨肉の恩愛」は自分と代助の間に永久に持続するものであつた。それゆゑ、子の代助がいくら内心において父親の自分に不快を感じ、苦痛を感じても、その憤懣は「血肉の親子」の間に流れている「骨肉の恩愛」を超えられないはずがないと信じ切つていた。したがつて、当然父は「自分の教育が代助に及ぼした悪結果に至つては、今になつて全く気が付かずに」(三) いたのであるが、その「悪結果」が「自分に冷淡な一個の息子を作り上げた」のであり、それがとりもなおさず「それからついでぞ怒つた試しがない」という「nil admirari」の状態として表出されたのである。「昔の自分（父―引用者注）と、今の自分の間には、大きな相違のあるべき筈である」(九)が、それを自認していいない父を「自己を隠蔽する偽君子か、もしく

は分別の足らない愚物か、何方かでなくてはならない様な気がした。さうして、左う云ふ気がするのが厭でならなかつた」という代助の心情は、父子の間に暖かい情を交わすことのできなかつたために生じた悩みの一変形といえよう。

〈家〉制度を倫理の根幹として国家統治のイデオロギーを確立しようとした明治民法は、戸主に家族構成員に対する扶養の義務を課したが、その代償として強力な父権（家父長権）を付与した。代助の父もまたその「親の義務」としてこれまで代助に経済的補助をして来たし、その反対給付として「代助の軌道を支配する権利」を行使してきた。しかし、息子の代助からすれば、そのような権利を正当化する教育というのは、まったく「骨肉の恩愛」を仮装した父権を専制的に執行する一方便にすぎないとみなされた。ただ、あらゆる趣味生活に耽溺する「アーティスター エレガントアルム artiller elegantiarum」的な暮らしに重きを置いたその当時の代助は、父の教育の実体に対して無自覚であつた、というよりも、それほど重大な意味をもたせなかつたといつてよいかもしれない。あるいは、いまの生活を享受するためには父からの経済的な援助が必要条件であつたため、その薫育に甘んじていたのかもしれない。

しかし、たとえそうではあつても、父から擦り付けられた「鍍金」（薫育）をもつて「金」に通用させようとした代助の姿からは、やはりかれも結局のところ、父と同じ考えをもつていたとみることもできる。その代表的な例が前述した平岡と三千代を取り持ったことであつた。ところが、それが自分の本心（意志の自由）を犠牲にした安っぽい義侠心になつてなかつたことに気づかされた瞬間、あらためて自己欺瞞を見据えるようになり、これまでの自己に大きな影響を与えてきた父の薫育についてあらためて考え直すようになった。代助が「日本現代の社會状況のために、幻イリュージョン像打破の方面に向つて、今日迄多く費やされた」（七）とある述懐は、おそらくその瞬間であつた。それが三年前である。薫育が媒介する父との関係はこうして代助を徐々に無感動・無為の状態に陥れる遠因になつたのである。

五

代助はいま、父から結婚を強いられている。父は代助が大学を卒業するまえから、嫂の梅子をとおして何度も縁談を持ち出してはいたのだが、今度は直接乗り出して代助を結婚させようとする。父は代助にまず「一體是からさき何うする料簡なんだ」（九）とたずねる。そして「獨立の出来る丈の財産が欲しくはないか」「洋行する氣はないか」と代助の意向をた

だしてみてもいる。代助が無論欲しい、洋行するのもいいと答えると、父はそれにはまずといって、意気込んだようすで結婚を持ち出すのである。

其時父は頗る熟した語氣で、先づ自分の年を取つてゐる事、子供の未來が心配になる事、子供に嫁を持たせるのは親の義務であるとか云ふ事、嫁の資格其他に就ては、本人よりも親の方が遙かに周到な注意を拂つてゐると云ふ事、他の親切は、其當時にこそ餘計な御世話に見えるが、後になると、もう一遍うるさく干渉して貰ひたい時機が来るものであるといふ事を、非常に叮嚀に説いた。(九)

代助の父は、父が子に嫁を持たせるのは「親の義務」だから、その段取りを決めるのもまた父の義務だとみなしている。そのために、自分は嫁の候補者について綿密な注意を払っているわけだから、自分の勤める佐川の娘をもらうがいいと伝える。彼女と結婚すれば、独立ができるだけの財産が手に入るのだから、自分の行為は「親切」な親心によるものだと伝へる。しかし、その娘が地方の多額納税者の娘であることを知っている代助は、「義務」を「親切」にすり替えながら勧める父のもくろみを読み取っている。それゆゑ、「貴方にそれ程御都合が好い事があるなら、もう一遍考へて見ませう」と皮肉るのである。その言葉に機嫌をそこねた父は、「何も己の都合許で、嫁を貰へと云つてやしない」といい、「御前はもう三十だらう、三十になつて、普通のものが結婚をしなければ、世間では何と思ふか大抵分るだらう」「獨身も本人の隨意だけれども、獨身の爲に親や兄弟が迷惑したり、果は自分の名譽に關係する様な事が出来たりしたら何うする氣だ」とたしなめてみたりもする。

父がこれほどまで家父長的權威に執着するところからみると、直接嫁を選ぼうとする本當の理由は、代助の将来に対する心配よりも、むしろ「家」の永続への意志であつたとみることが出来る。父は「金は取らんでも構はない。金の爲に兎や角云ふとなると、御前も心持がわるからう。金は今迄通り己が補助して遣る」(三三)といいながら、その一方では、独立ができるだけの財産が欲しければ佐川の娘と結婚するがいいともいう。父にとつては、眞の意図が政略結婚というきわめて功利的なものであつたために、代助を説得するにあつてこうした矛盾が生じたのであろう。つまり、父は息子のためといながら、その実は、不景氣のために不振に陥つた自分の経営する会社―それは「家」の永続にとつてはなくてはならないものである―を立て直すために、地方の有力者である佐川家と姻戚となることで、その支援を引き出そうと

もくろんでいるのである。

石原千秋氏は父の勤めるこの「因縁つき」の結婚に対して、「〈家〉にとつてはもはや〈余計者〉でしかない代助を」「経済的な有用性の尺度で運用しようとしておきながら、なおかつそれが血縁の幻想に連なるものであるかのように見せかけ、また実際そう機能することで、形だけは長井家の枠組の中に留めておくための、最良の、そして非常に巧妙なやり方」であると指摘する。氏のいうとおり、確かに、父はいま〈家〉の存続という幻影をふりまわして代助の自由を剝奪しようとしている。代助は〈家〉と〈家〉との取引をおして自己の本心（意志の自由）を犠牲にしなければならぬ。そのために、「進まぬものを貫ひませうと云ふのは今代人きんだいじんとして馬鹿氣でゐる」（十三）というように、近代人としての〈自我〉の主体性を押し殺さねばならないのである。

代助はこの間、東京で学校を卒業すると、父の命で故郷にひきとめられ結婚させられた友人から手紙を受け取ったことがある。学生時代には自分と同じ思想をもっていたその友人が、今はまるでそれとは異なる生活をしている様子を、その手紙から感じとつたのだが、だからといって友人を軽蔑することはしなかった。むしろ、友人の結婚を肯った。

山の中に住んで、樹や谷を相手にしてゐるものは、親の取り極めた通りの妻を迎へて、安全な結果を得るのが自然の通則と心得たからである。彼は同じ論法で、あらゆる意味の結婚が、都會人士には、不幸を持ち來すものと斷定した。其原因を云へば、都會人は人間の展覽會に過ぎないからであつた。

（十一）

代助は、観念的には〈家〉と〈家〉との結びつきとかたかた成り立つ因襲的な結婚観を否定はしないが、だからといって、実際自分の結婚においてはそれを認めたくなかつた。それゆえ、代助はみずからが信ずる個人の自由を守るために、その友人と自分との差異を〈田舎者〉と〈都會人〉のそれに求め、自分の生き方を友人の結婚観から切り離そうとする。代助がみずからを〈都會人〉として規定しようとしたのは、さまざま美に接触する機会を得るのが「都會人士の權能」であり、その接触をおして豊かになつた感受性によつて「都會的生活を送る凡ての男女は、兩性間の引力に於て、悉く隨縁臨機に、測りがたき變化を受けつゝある」という持論にもとづくからであつた。これは、自分が現在身を寄せている都會を地方に根強く存続する〈家〉制度のもつあらゆる束縛からの避難所とみなし、とりわけ、いまかれが強いられ

ている結婚問題から逃れようとする逃避の場にしようとする論理でもあった⁽⁹⁾。

ここで代助が主張する「田舎」と「都会」という差異の認識は、『吾輩は猫である』のなかで同じく「田舎」と「都会」の差異を説く迷亭の言説の延長線上にあるというべきであろう⁽¹⁰⁾。ここにおいて、前述した代助に典型化されている「高等遊民」という社会的存在を想起する必要がある。この小説がそれ以後、代助をして痛切に自覚させることになる「自我」という近代的な個人の確立の問題が、漱石のいう「田舎」から出てきて間もない「都会」の遊民と結びついていることが注目される。明治期の都市の遊民にあつては、「田舎」とは「家」制度と家父長、そして封建的道德がその共同体の秩序を支配している負の世界にすぎなかった。それゆえに遊民はそこから積極的にみずからを疎外させたのである。しかし、だからといって、かれらは「都会」都市にあつても、「遊民」として生きるだけで、なんら生産にたざざわることがない。いわば都市からもまた疎外された存在であつた。そのために、かれらは非生産的な芸術にのみ向き合わざるをえない。「都会」の孤独者とならざるをえない。漱石的自我の特異性は、そのような孤独者の想念から生まれ出ようとしていたところにある。したがつて、「田舎」にいまだ色濃く残る「家」制度に対しては、かれら遊民は「自我」の主体性をもつて対抗するのだが、その背景には都市の孤独者ゆえの強烈な反発と憎悪が隠されていたのではなからうか。

六

代助はいま、父の勧める結婚を受け入れるべきか、それともそれを拒否するべきかという岐路に立たせられている。その岐路にあつて始めて、いつかは自分の「安住の地」を求めなければならぬと感じるようになっていた。一章の終わりに、写真帖をめくっていた代助が途中できてびたりと手を留め、そこにある「二十歳の女」の写真の顔をじつと見つめている場面は、ここまで追い詰められた代助のありようを暗示している。それというのも、代助は写真帖をみる直前に受け取つた、これが着いたら家へ来てくれと書いてある父からの手紙がかれの結婚問題にかかわるものであることは分かっていた。その直観に突き動かされるように、父からの手紙を受け取るやいなや、自分の書斎についてアルバムを取り出したというのは、かれがその瞬間からその女性、すなわち三千代を自分の「安住の地」として意識するようになったのかも知れないという推測ができるからである。

したがって、こうした冒頭の場面は、以降父の勧める結婚を受け入れられるべきかどうか。すなわち、(家)制度の束縛によってそこに埋没させられようとする自己のアイデンティティを守るべきか、放棄するべきかという岐路に立たされたとき、その道案内役を演じてくれる人物が三千代であることを暗示するための周到綿密な伏線であったといえる。いまそれを作者が作品の至る処にはりめぐらした暗示を中心に追ってみることにしよう。

ある日、代助はダヌンチオという人物が、自分の部屋を青色と赤色に塗り立てたという話をふと思い出して、できるならば「自分の頭丈でも可いから、緑のなかに漂はして安らかに眠りたい」(五)と考えたことがある。そしてまた、ある展覧会で海の底に立っている女の絵を見て、自分も「あ、云ふ沈んだ落ち付いた情調に居り」たいという感傷に耽つたこともあった。これらはいずれもかれの潜在意識下での「安住の地」への憧憬が脈絡もなしにかれの脳裏に浮かんできたのであろう。そのとき、

代助は縁側へ出て、庭から先にはびこる一面の青いものを見た。花はいっしか散つて、今は新芽若葉の初期である。はなやかな緑がはつと顔に吹き付けた様な心持ちがした。眼を醒す刺激の底に何所か沈んだ調子のあるのを嬉しく思ひながら、鳥打帽を被つて、銘仙の不斷着の袂門を出た。

(五)

とあるが、ここで代助が不斷着のままで足に任せて歩いたところが、三千代の家であったということは注目すべきである。というのは、無意識の裡でその家に向かったという、その三千代の存在こそが、かれの「安住の地」であるということを暗示するからだ。

またこんな事例をあげてもよからう。ある日、予期していた三千代の訪問がなかったときの代助の心は、なにとはなしに空虚な感じを覚えさせられたという。その空虚感も代助の心奥にひそんでいる。「安住の地」への憧憬の裏返しだったのではなからうか。ただそうだからといって、代助には「此空虚な感じを、一つの経験として日常生活の中に見出した迄で、其原因をどうするの、斯うするのと云ふ氣」(十)はなかったのであって、この時には、その憧憬はまだ潜在意識の域を超えてはいなかった。

そうした潜在意識を心の表層に顕在化させたのは、父に加担した兄夫婦のもくろみによる、思いがけない見合いのため

であった。代助は佐川の娘との見合いの場に呼ばれたのだ。いままで〈家〉のなかで一番身近に感じ、唯一頼りにしていた嫂までが、「父や兄と共謀」(十一)して、望まぬ結婚に自分を引きずり込もうとしていることに気づかされる。その瞬間、代助は嫂も実は自分の味方ではないのではないかという不安に襲われる。「もし嫂が此方面に向つて代助に肉薄すればする程、代助は漸々家族のもとと疎遠にならなければならぬと云ふ恐れが、代助の頭の何處かに潜んでゐた」。

代助には母親がいなかった。作品の世界にも母に関する叙述は、ただ「母も死んで仕舞つた」(三)としか記されていないため、いつ死んだかも明確でない。おそらく代助が幼い頃に亡くなったと推定してもよからう。だとすれば、末っ子であり、まだ独身である代助は、家父長の支配する〈家〉とどのように結びついていたのだろうか。端的にいえば、その媒介となってくれたのが嫂の梅子であった。彼女がいれば母親の役割を演じてくれた。この梅子について、佐々木充氏は「息子に対する母親のごとき、と称してよい」⁽¹⁾であろうという。氏によれば、代助が三千代との関係を発展させるべきかと迷っているとき、その迷路からの脱出を手助けする存在として、作者は嫂梅子を設定したからだといひ、その傍証として次の箇所を挙げている。

「もし、其細君に好きな人があつたら何うです」

「知らないわ。馬鹿らしい。好きな人がある位なら、始めつから其方へ行つたら好いぢやありませんか」

代助は黙つて考へた。しばらくしてから、姉さんと云つた。梅子は其深い調子に驚ろかされて、改ためて代助の顔を見た。代助は同じ調子で猶云つた。

「僕は今度の縁談を断らうと思ふ」

代助の巻烟草を持つた手が少し顫へた。

(十四)

この瞬間が代助の決意の時であり、その決意を促す役割を嫂梅子が演じたという氏の見解には賛成である。しかし嫂は、代助と三千代との関係については気づかないでいたため、決して代助の不倫を助長する意図を含んではない。〈家〉と〈家〉との結びつきとしての結婚を肯定する考への持ち主である彼女にしてみれば、人妻を横取りすることなどどうてい考えられない。次の代助との対話は、嫂の〈家〉を背景とする結婚観を垣間みせている。

「佐川にそんな娘があつたのかな。僕も些つとも知らなかつた」

「御貰ひなさいよ」

「賛成ですか」

「賛成ですとも。因縁つきぢやありませんか」

「先祖の拵らえた因縁よりも、まだ自分の拵らえた因縁で貰ふ方が貰ひ好い様だな」

「おや、左様なものがあるの」

代助は苦笑して答へなかつた。

(三)

梅子の最後の反問が、結婚は個人の問題（自由）という考え方を否定する彼女の結婚観を代弁する。梅子は外観的には近代期にふさわしい開けた女性のように見えるかも知れないが、実際はそうではない。ここで彼女に対して語り手が「天保調と明治の現代調を、容赦なく継ぎ合せた様な一種の人物」（二三）と紹介していることに注目してみたい。「天保調と明治の現代調」という表現は、彼女の容貌や思想をたとえるための修辞であろう。彼女は封建的な一面と近代的な一面を兼ねている。というのは、代助が〈家〉制度の束縛から抜け出そうとしながらも、依然として〈家〉のなかに身を寄せることができたのは、まさにそうした両義性を兼ねそなえたスポンジのようなこの嫂があつてこそ可能であつたからである。これまでの代助はこの嫂から「今代人」としての自分を理解してくれるだろう近代的な一面に甘えてきた。代助は「もし、其細君に好きな人があつたら何うです」と嫂に聞くと、「知らないわ。馬鹿らしい。好きな人がある位なら、始めつから其方へ行つたら好いちやありませんか」といつた彼女の答えを予測していたのかも知れない。

ところが、代助は兄が「大抵不在勝」（二三）ちな家庭生活をしているのを見て、嫂に「姉さんはそれで淋しくはないですか」と聞いたとき、彼女は「今更改まつて、そんな事を聞いたつて仕方がないぢやありませんか」と笑い出し、物足りない素振すら見せない。そんな彼女はそのまま〈家〉への忍従を肯定する封建的思想の持ち主でもあつた。この点では、同じ状況ながら「淋しくつて不可ないから、又來て頂戴」（十三三）という三千代とは対照的であるといつてよからう。

〈家〉のなかで代助の感性を包み込んでくれた人物は嫂の梅子であつたが、そんな彼女も決して〈家〉の論理を忘れてはいなかつた。代助に「御父さんが、殊によると、今度は、貴方に一から十まで相談して、何か爲さらないかも知れませ

んよ。御父さんから見ればそれが當り前ですもの」とか「然し御父さんの身になつて御覽なさい」(十四)、あるいは「自分の命の親に當る人の血統を受けたものと縁組をするのは結構な事であるから、貰つて呉れ」(七)という忠告をする姿が彼女の本領であつて、佐々木氏がいうように、彼女が代助の「個性」を認めたくて、かれの自由を許したわけではなかつた。むしろその反対に、「家」の論理を代助に強いることによつて、かれの決意を促したのである。代助はこれまでは嫂に「母」の面影を感じて心の安らぎをおぼえてきたわけだが、今度の見合いをきっかけに「家」の代弁者としての彼女に気づき始めた。だからこそ、代助が嫂の「肉薄」を大きな危機として感じざるを得なかつたのである。作品世界のなかで嫂梅子が占める眞の位置と役割はまさにその点にあつた。

代助は佐川の娘との不意の見合いの後、帰宅の電車のなかで、脳裏に「交る／＼痕を残した色彩」(十一)が無秩序に一斉にちらついていることに気づく。しかしそのときは、それが何なのかはついにわからなかつた。が、床に就くまえに、ふと代助は感傷に耽る。

此取り留めない花やかな色調の反照として、三千代の事を思ひ出さざるを得なかつた。さうして其所にわが安住の地を見出した様な氣がした。けれども其安住の地は、明らかに、彼の眼に映じて出なかつた。たゞ、かれの心の調子全體で、それを認めた丈であつた。従つて彼は三千代の顔や、容子や、言葉や、夫婦の關係や、病氣や、身分を一纏にしたものを、わが情調にしつくり合ふ對象として、發見したに過ぎなかつた。(傍点引用者) (十一)

代助の脳裏をかき乱していた「花やかな色調」は佐川の娘の象徴であつた。それは美貌と富をそなえている彼女の色調である。そして佐川の娘との結婚について、「斯んな意味の結婚(父が「露骨過ぎる」ほど勧めている「策略的結婚」——引用者注)を敢てし得る程度の人間だと自ら見積てる」(十五)る代助にとつては、その「花やかな色調」はかれの「贅澤な世界」をひとしお引き立てる色調でもあつた。

しかし、三千代への愛がつのつていく代助が眞に安らぎを感じ憧憬を覚えている色彩はそうした華やかなものではない。かれの愛情が流れ入るべきところは「青色」の「海」であつた。それが代助の前にも着白い顔色で姿をみせる三千代を象徴するものであつたからだ。「色合から云ふと、もつと地味で、氣持から云ふと、もう少し沈んでゐた」(七)という

描写からすれば、むしろもっと陰鬱な深い蒼色をたたえた海のイメージのほうが、よりびつたりするかもしれない。

〈家〉のなかで「安住の地」であるはずの〈母〉がいなかった代償として、無意識の裡にそれを嫂に求めてきたのだが、その嫂もまた自分の「安住の地」でないことを悟ったとき、代助にとつては、三千代の存在そのものがさらに重い意味をもつようになった。三千代に会うと、なぜか永遠の安らぎを感じることができたのは、そうした背景があったからである。

七

しかし、「其安住の地は、明らかに、彼の眼に映じて出なかつた」(十一)。それも道理。かれの「安住の地」は人妻であつて、それを求めるのは「人の掟」に背く不倫の行為だからである。この揺れ動く自分の心を収拾できないでいる代助の姿は、すでに三千代の帰京のときからうかがえる。そのころ、新聞の連載物「煤烟」(六)を読んでいた代助は、その主人公の「要吉といふ人物にも、朋子といふ女にも、誠の愛で、已むなく社會の外に押し流されて行く様子が見えない」と感じられ、では、かれらを動かす内面的な力はいったい何であろうかと沈思したことがある。そのとき代助は、二人の果敢な行為を可能ならしめる原動力を「情愛の力」だと思ひ、「誠の愛」をつらぬくことを断行した二人はおそらく不安ではあるまいと、かれらの行為を納得したのであつた。ただ自分らとその二人の間には懸隔があるように思われたので、代助はその連載物には眼を通さないこともよくあつた。

そんな代助は、三千代が帰京した後のある日、「腹のなかに小さな皺が無数に出来て、其皺が絶えず、相互の位地と、形状とを變へて、一面に揺いてゐる様な氣持」がして、「自分が落ち付いてゐないと云ふ事を、漸く自覺し出した」。無数の皺が形状を変えて描き出すオブジェは、あたかも「煤烟」事件にオーバーラップされた自分と三千代の未来の予感であつたのかも知れない。こうした異常な心理に耐えられなくなつた代助は、三千代のところへ出かける。その行為からは、「煤烟」を読んだときの、心の深奥にひそんでゐる得体の知れないかすかな不安がいま心の表層に浮かび上がつてきていることを見出すことができよう。代助は二人の主人公が「誠の愛」をつらぬこうとして、かえつて「社會の外に押し流されて行く」矛盾を感じざるを得なかつたのだが、そうしたやり切れぬ思ひは、三千代との關係にも及んで、

此所で彼は一のヂレンマに達した。彼は自分と三千代との關係を、直線的に自然の命ずる通り發展させるか、又は全然其反對に出で、何も知らぬ昔に返るか。

(十三)

と躊躇する。自分が三千代を愛している以上、この二つの道以外の生き方などは、すべてがもはや偽りであると考へると考へる代助のヂレンマの波長は、次第に激しくなっていく。

彼は三千代と自分の關係を、天意によつて、——彼はそれを天意としか考へ得られなかつた。——醜醉させる事の社會的危險を承知してゐた。天意には叶ふが、人の掟に背く戀は、其戀の主の死によつて、始めて社會から認められるのが常であつた。彼は萬一の悲劇を二人の間に描いて、覺えず慄然とした。

彼は又反對に、三千代と永遠の隔離を想像して見た。其時は天意に従ふ代りに、自己の意志に殉ずる人にならなければ濟まなかつた。

(十三)

明晰な頭腦の持ち主であり、いままで論理を離れて生活したことのない「理論家」代助は、自己の生活を理論に従わせるべく管んできた。それゆゑ、三千代との不倫關係を自分の信ずる「自然」や「天意」のままに發展させれば、それがどんな「社會的危險」を招くかをよくわきまえていた。個人の意志の自由という問題がいまや社會の制度、道德との対決というかたちで自覺させられてきたことを見逃してはなるまい。しかし、だからといって、「人生に對する自家の哲學」の根本（十六）にふれるこの重大問題について、「自己の意志に殉ずる」虚偽の道を選ぶことはなおさらできない。換言すれば、「情意行爲の標準を、自己以外の遠い所に据ゑる」といつた封建的な倫理觀を拒否し、自己を唯一の根拠とするようになつていた代助にとっては、三年前の二の舞を演ずることはもつとも迂闊なことであつた。

自分たち二人の間を遮つている「世間の掟」（結婚という制度）をことさらに強く意識し、その前に立ちすくまねばならぬ無力さを感じざるをえなかつた代助は、その障害を取り除くべき「論法」を生み出さなければならぬ。

一番仕舞に、結婚は道德の形式に於て、自分と三千代を遮断するが、道德の内容に於て、何等の影響を二人の上に及ぼさうもな

いと云ふ考が、段々代助の腦裏に勢力を得て來た。既に平岡に嫁いだ三千代に對して、こんな關係が起り得るならば、此上自分に既婚者の資格を與へたからと云つて、同様の關係が續かない譯には行かない。それを續かないと見るのはたゞ表向の沙汰で、心を束縛する事の出来ない形式は、いくら重ねても苦痛を増す許である。と云ふのが代助の論法であつた。(十四)

こうして代助は、「結婚」という形式が自分と三千代との關係に「道德の内容に於て」何らの影響も及ぼさないと結論づける。自分と三千代との間の「自然の事實として成り上がった夫婦關係」(十六)は、「世間の掟」として制度化されてゐる夫婦關係を超えたものだとかれはみずからを納得させていたからである。一般にいう「道德」とは、確かに、多数の人の觀念のなかに存在するものであるが、ただそうだからといって、それがすべての個人の觀念を支配し得るものではない。代助はいままで「自分の腦裏に願望、嗜欲が起るたび毎に、是等の願望嗜欲を遂行するのを自己の目的」(十一)として生きてきた。たまたま二つの相容れざる願望とか欲望が自己の内部で戦う場合には、「たゞ矛盾から出る一目的の消耗」と解釈し、ただちにその一つを捨てるのがつねであつた。そして、そうした自分の行為について「他を偽らざる點に於てそれを尤も道德的なもの」と考えていた。このような代助の「道德」には注意する必要がある。すなわち、「自然の兒にならうか、又意志の人にならうか」(十四)と迷つてゐる代助には、みずからの道德觀からすると、自己の内部で共存させることのできない、このような矛盾が生じたならば、躊躇することなしに、「他を偽らざる點に於て」ある一つを選択しさえすれば、それは道德的な行為になると信じていた。選択をした後に心に生ずる感情の波紋、あるいは外部からの非難や圧力などは、「たゞ矛盾から出る一目的の消耗」という範疇にくくつてしまい、自己において葬り去ればすむということになるからである。

代助は自分の人生において、すべての「最後の權威は自己にある」と固く信じてゐる人物である。また、社会が個人に對していくら「制裁の權」(十五)をもつてゐるとしても、「動機行為の權」はまったく自己の「天分」から湧いて出るよりほかに道はないと信ずる人物でもある。今度の決意においても「父も兄も嫂も平岡も、決斷の地平線上には出て來なかつた」(十四)のは、こうしたかれの考えからすれば、自然なことであつたらう。代助は自己の意志にしたがつて選択した自己の運命に對して、「父と決戦すべき準備を整へた」(十五)のだ。父の背後には兄夫婦、つまり「家」がある。そして平岡がいる。かれらを切り抜けても、その背後にはさらに「個人の自由と情實を毫も斟酌して呉れない器械の様な社會」

が厳然として存在している。しかし、代助は「凡てと戦ふ覺悟」を決める。極端には「父子絶縁の状態を想像して見た」(十三)ほどの悲壮な決意で……。

こうして自己の意志の自由——それはとりもなおさず自我といいうるが——に絶対の根拠を置こうとする代助は、父の勧める結婚を断るしかないと考ええる。そして翌日、「久し振りに髪を刈つて髻を剃つた」(十四)。一日でも鏡の前に自分の姿を映さなかつたことのない代助が、久し振りに髪と髻を剃つたというのは、かれの心理状態がどれほど緊迫していたかを暗に知らせてくれる。代助は心のうちで「今日から愈積極的生活に入るのだ」と自分のすべての敵に対して宣戦布告をする。代助にとつて、みずからの意志の自由(自我)を束縛したり、制限しようとするものは「敵」であつた。それが社会の制度や道徳であらうとも、一旦自己の意志の実現をさまざまげると自覚されたならば、やはり「敵」である。それゆえ、「積極的生活」とは、制度や道徳に抗して三千代との愛を深めることであつて、言い換えれば、「自然の命ずる通り」に愛を実践することを意味する。

意志の自由、すなわち自我の絶対を自覚した代助は、その全的な実現を達成する過程および存在を「自然に帰る」あるいは「自然の児」と認識する。

「今日始めて自然の昔に歸るんだ」と胸の中で云つた。斯う云ひ得た時、彼は年頃でない安慰を總身に覺えた。何故もつと早く歸る事が出来なかつたのかと思つた。始から何故自然に抵抗したのかと思つた。彼は雨の中に、百合の中に、再現の昔のなかに、純一無雜に平和な生命を見出した。其生命の裏にも表にも、慾得はなかつた、利害はなかつた、自己を壓迫する道徳はなかつた。雲の様な自由と、水の如き自然があつた。さうして凡てが幸であつた。だから凡てが美しかつた。

(十四)

代助はいままで自分を圧迫してきた「道徳」から解放され、自己の内部に「純一無雜に平和な生命」を見出す。その「道徳」とはいままでもなく、父権の支配する(へ家)制度を支える社会の秩序体系であらう。そして自分のうちには、「雲の様な自由」と「水の如き自然」だけがあつて、もはや苦痛、束縛などは存在していないと感じるとき、そこに(へ家)と(自我)——意志の自由——の相克の構図がひそんでいることを見逃すべきではなからう。それが漱石的自我の確立の前提となるモチーフであることは前節でふれておいた。いま代助を包んでいる「幸」は、かつてかれが失つた「自然」を取り戻

すことができる瞬間に味わう恍惚感であろうが、しかしある意味で、それは個人における意志の自由の前にはあらゆる制度や習慣も無化されるといふ自己陶醉にすぎないともいってよからう。その手痛いしつべ返しがない現われる。それはいうまでもなく、愛をつらぬこうとする代助と三千代との二人が社会から疎外される必然を甘受せねばならぬことである。その運命はこの小説の展開が教えてくれよう。

代助はかつて「煤烟」を読んだとき、その主人公たちの生き方とは反対に、愛の実行に躊躇する自分に「不安の分子」(六)を悟った。その瞬間すでに、心の底ではかれらの生き方に対するあこがれがきざしていたのかも知れない。そしてまた、かれらが社会から疎外される運命そのものにすでに三千代と自分の運命を重ね合わせていたのかも知れない。その形跡が次の三千代との対話に無意識の裡に影を落としている。

「貴方は是から先何したら好いと云ふ希望はありませんか」と聞いた。

「希望なんか無いわ。何でも貴方の云ふ通りになるわ」

「漂泊」

「漂泊でも好いわ。死ねと仰しやれば死ぬわ」

(十六)

この「漂泊」(疎外)は『それから』に続く『門』(明治四三年)のなかで、朝日の影も落とさない崖下の借家に住む、主人公宗助とその妻お米夫婦の姿につながるといつてもよいであろう。冒頭の、穏やかな秋の日差しに横たわって、海老のように固く丸まって寝ている宗助の姿は、『それから』のなかで「自然の兒」として生きることを決心したものの、「世間の掟」に対する罪の意識ゆえに市井の片隅に逼塞せざるをえない代助の未来像ではなからうか。

八

作者漱石は『それから』の主人公として、いわば〈高等遊民〉を設定した。社会からすれば〈余計者〉でしかない、このような人物を主人公として選んだということは、この作品が新聞小説であることを勘案すれば、当時の社会状況をリア

ルに汲みとつたためである。が、漱石は代助に最後まで「高等遊民」として生きることを許さなかった。このことは、漱石が遊民としての代助を悲惨な結末に追い込むことによつて、遊民の行末を讀者の前に提示しようとしたのではなく、それよりもつと深いテーマを社会状況に即するかたちで追究しようとしたことを意味するのではないか。

このように漱石固有のテーマ性が問題とされる時、代助が遊民であつたがゆえに「余計者」にふさわしい結末に至つたという単純な事実より、かれが遊民にならざるをえなかつたその背景に注目しなければなるまい。その背景とは、端的にいえば、個人のもつ「自我」に目覚め、意志の自由に従つて生きようとした代助の生き方を規制する明治期という時代を画するといつてもよい「家」制度だといえる。高度の知識人であり、旺盛な生活欲をもつてはたらくべき年頃の代助が若い頃から無感動・無為の状態に陥つてゐるという、かれの異常なありようを生んだのはとりもなおさず「家」制度である。

作品のなかで、代助がみずからの「自我」にめざめるようになったときつかけは、家父長を始めとする「家」の構成員が自分の意志を無視し、「家」の論理によつて結婚させようとたくらんだことであつた。その瞬間から代助は、これまで「家」に身を寄せる一方便でもあつた無感動・無為の状態から脱出しようとする。かれが「家」の束縛から脱出するのを手伝う役目を演ずる人物として、作者は二人の女性を設定した。一人は代助が「家」のなかでこれまで頼りにしていた嫂梅子である。が、結局彼女も「家」の論理の代弁者であつて、代助の自我を認めようとはしなかつた。その嫂の態度に代助は危機を感じるようになり、自己の存在を見すえるようになったのである。

もう一人は、かつて愛していながら友人平岡に譲つた女性、三千代である。代助が彼女と平岡の仲を取り持つようになつたのは、父から影響されてきた「眞鍮」のような道義が作用したからである。しかし、彼女を失つて始めて、安っぽく発揮された義侠心に埋没された自己の意志のありように気づかされる。その彼方にたち現われてきたのが「自然」「天意」であつた。三千代という人物は、代助からすれば、いつかはとり戻すべき「自我」でもあつたといえる。代助がすでに人妻になつてゐる三千代を奪ふことで誠の愛を実現させようとした眞の理由は、まさにその点にあるといえよう。しかしながら、代助と三千代との愛の演奏があまりにも印象的であつて、讀者の脳裏から去ることがなかつたためであらう、これまでこの作品は恋愛小説として多く読まれてきた。しかし、その恋愛の成就に至るまでの背景に、旧秩序の因襲と思想を温存する「家」制度の束縛によつて悩む代助が敷衍している以上、この作品を「家」と「個人」の相克の物語としてとら

えるべきではなからうか。

その相克の構図から作者が描き出そうとしたのは、個人の〈自我〉を深部において侵してゐる〈家〉制度への憎悪である。父がすべての構成員の意志を支配する〈家〉のなかにおいてみずからの意志の自由が束縛されてゐると自覚したとき、代助は「父子絶縁」まで決心したという事実から、そうした作者の作意が読みとれよう。

代助は〈家〉制度との対決をとおして、逆にみずからの〈自我〉を自覚したのだ。この〈自我〉の自覚の構図に漱石の抱いてきたモチーフが端的に表出されているといつてよからう。漱石が自覚と確立をうながしてやまなかつた〈自我〉の観念は、〈家〉との対決、そしてその〈家〉からの析出というかたちで読者の前に提示されたわけである。その意味で、この作品こそ、初期作品における漱石の自我が始めて結晶された記念碑といつてもよからう。

注

夏目漱石の文章はすべて『漱石全集』（岩波書店、昭和四十年―四二年）によつた。

(1) 猪野謙二『それから』の思想と方法（太田登・木股知史・萬田務編『漱石作品集第六卷・それから』桜楓社、一九九一年）一九頁

(2) 平岡敏夫『それから』論（『日本文学』昭和四四年三月）。引用は『漱石序説』（塙書房、昭和五一年）一三九頁

(3) 吉田熙生「代助の感性―それから」の一面（『国語と国文学』五八巻一号、一九八一年一月）。引用は太田登・木股知史・萬田務編『漱石作品集第六卷・それから』（桜楓社、一九九一年）一二五頁

(4) 石川啄木「時代閉塞の現状」（執筆は明治四三年八月頃と推定。大正二年刊の『啄木遺稿』に収録されて始めて世に出た）

(5) 米田利昭「漱石作家論事典・高等遊民」（三好行雄編『夏目漱石事典』學燈社、平成二年）一三八頁

(6) 夏目漱石『京に着ける夕』（岩波書店、昭和四一年）一一頁

(7) 注1同書、二十頁

(8) 石原千秋「反Ⅱ家族小説としての『それから』」（『東横国文学』一九号、一九八七年三月）。引用は太田登・木股知史・萬田務編『漱石作品集第六卷・それから』（桜楓社、一九九一年）一九三頁

(9) ちなみに、石原千秋氏は「反Ⅱ家族小説としての『それから』」において、『都会人』とは単に『都会』に住む人を言うのではない。

〈家〉の論理の必然として、そこからはじき出されて、あるいは自らそれを捨てて『都会』に住む〈余計者〉を言う」といって、〈余計者〉として代助のありように注目しているが、かれが〈田舎人〉と〈都会人〉の間に差異を求めている真の理由は、やはり自分が現在身を寄せている都会を〈家〉制度のもつあらゆる束縛からの非難所とし、とりわけいまかれが強いられる結婚問題から逃れようとする非難の場にしようとする論理として解釈するのが妥当であろう。

(10) 『吾輩は猫である』(明治三八年)の十一章のなかで、迷亭は、近代期に入って個人と個人との間に余裕を求める傾向が強くなるにしたがって、その苦し紛れに案出した方案が「親子別居の制」であると説く。その言説によれば、田舎の家で、家長を除いてはほかの家族構成員の個性は認められないから、お互いの個性を尊重するためには別居しなければならないということになるが、この親子別居という思想が代助の「田舎人と都会人」論の原型であるといえよう。

(11) 佐々木充「『それから』論—嫂という名の〈母〉—」(『国語と国文学』六六卷一号、一九八九年一月)。引用は太田登・木股知史・萬田務編『漱石作品集集成第六卷・それから』(桜楓社、一九九一年)二二五頁

(12) 西洋音楽が好きだったり、子供にピアノの稽古やベースボールなどをやらせたりしながら、代助と趣向が合う梅子は、外観的にはやはり近代的な女性として描かれているとみることができると。